日本の昔話——20

羽後の昔話

■稲田浩二監修

■今村泰子編

日本放送出版協会

監修者

稲田浩二（いなだ こうじ）　1925年岡山市生まれ。広島文理科大学を卒業し，現在，京都女子大学文学部教授。
主著・主論文に『日本昔話通観』（共編）『昔話は生きている』『説話文学必携』（共著）「日本霊異記話型の一考察」「今昔物語集の説話性に関する試論」など。

編　者

今村泰子（いまむら やすこ）　1916年熊本県生まれ。京都府立桃山高等女学校卒業
主著に『秋田むがしこ第1・2集』（共編）『秋田のわらべ歌』

日本の昔話20　〈検印廃止〉

羽後の昔話　定価 1800 円

昭和52年11月20日　第1刷発行

監修者　稲田浩二
編　者　今村泰子
発行者　藤根井和夫
印刷　凸版印刷
製本　石津製本

発行所　日本放送出版協会
東京都渋谷区宇田川町 41—1
郵便番号150　振替東京1—49701

©1977 Koji Inada
Yasuko Imamura　落丁本・乱丁本はお取替いたします
0339—015020—6023

いのち長きものへの畏敬

稲田浩二

遠いわれらの祖先から口づたえに伝えられてきた日本昔話の現状は、たとえていえば、目に見えない地下水のようなものです。それは、あわただしい情報と速度に飲みこまれた人々にとっては多分ふだんの生活には無縁であり、ときおりふとなつかしむ過ぎ去った日々、ふるさとのようなものでありましょう。けれども、その地下水は、いまもつつましく生きている、心ある人々がその気になってたずねるならば、やさしくことばをかけ、耳を傾けるならば、意外にみずみずしいことば——昔語りが地上にわき出るものなのです。わたしどもは、ここに一九七〇年代の一つの証言として、日本の各地にわたるこの種の実験をありのままにみなさまにご報告いたしたいと思います。

昭和の初年、柳田国男が昔話を学問の対象とした当時、すでに昔話は生活の表面から姿をかくしかけていたようです。柳田国男はこれを愛惜し、一日も早い調査をと人々に訴えています。それから半世紀たったいま、昔話はいっそう地表から深くもぐり、代ってブラウン管や活字の「民話」が

人々の目をうばっております。それにいちいち目くじらをたてるというのではありません。新しい皮袋に盛られて、「民話」はどこへ向けていくのか、多少の不安をもって見守りたい、とわたしなどは思っております。ただ、これまでこれほど一律に昔話が扱われたことはなかったので、昔話の世界も年とともに従来なかった変化を蒙るのではないかと思います。いや多分それはもうある程度まで進行しているにちがいありません。東北に伝承してきたはずの昔話が、ブラウン管や活字をへてこつ然として山陽地方に現われてくるということです。したがって、昔話が村や町、家々に伝わるという土着的・風土的な本質は、よほど注意深く扱わないと裏切られることになります。

「日本の昔話」はこの意味でかたくなに、村々家々に口づたえされてきた昔話に限って収めることにしました。編集にたずさわる皆さんはいちいち語り手のところにおもむいて、一つ一つの話を聞き出し、録音テープに収め、これをそのまま文字に移すことにしました。それはぶこつだけれど、ありのままの口づたえの姿を最もよくとどめるものだと思うからです。したがってこれは、読者のかたにそれほど口ざわりがよくない食べものかもしれません。土から掘り出したままの、いわば料理の素材だからです。ただそれをじっくり嚙みしめていただけるなら、現代日本のつつましい素顔の一つに出会えるはずです。テレビや書物でなめされない、日本人の飾らないものの見方、表現、よろこびとなげき……総じて日本人の人生のありのままがこめられています。

どうしたわけか、これらのことばは、同じ棟の下に住んでいる家族でさえも耳にすることがほと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

んどないものです。語り手ご自身も多くの人が何十年ぶりに語ったという種類のものです。したがって、大部分の話がたまたまよい聞き手の編集者に出会って、水を得た魚のようにふき出して世に出たものです。いまわたしどもは、これを命長きものへのいとおしみと畏敬の念をもって世におくりたいと思います。これがよい読者をえて、新しい明日をうんでいくかてとなれば、語り手とわたしどもの望外の幸せであります。

一九七七年四月

はしがき

「羽後の昔話」と言えば、羽後一国を範囲として収集した昔話を収録すべきであろうが、羽後の国から山形県飽海郡を除き、陸中国鹿角郡（現、鹿角市および鹿角郡）を加えれば、その全域は現在の秋田県の範囲に属するから、ここでは便宜的に秋田県内を対象として収録することにした。

本書に収めた昔話は、主として昭和四十八年の秋から五十一年夏にかけて新しく採集したもので、できるだけ既発表のものと重複しないように努めた。しかし、遺憾ながら、調査の足を全県隈なく伸ばすことは、肉体的にも、時間的にも制約された結果、昔話を広く網羅することはできなかったが、一応代表的な地域のものを収め得たことは、僅かながらも心の慰めであった。

ただ採集の度ごとに残念に思うことは、そうした昔話がだんだん聞かれなくなったこと、いわば語る人が少なくなったことである。それと平行して、良き伝承者が減り、語りの様式にも乱れがあり、完型を語る人も少なくなって、昔話の採集をしだいに困難にしてきた。その原因は、第二次世界大戦後、日本の経済、社会の急激な変化、とりわけ、昭和三十年代に始まる経済の高度成長、所得倍増政策の推進の中で、農業構造もまた形を変え、それが農村の生活にひずみをもたらしたことにある。ことに秋田のような積雪寒冷地で米の単作農業の地方では、その影響は深刻で、人口の過

疎化、出稼ぎの定着化などが進んできた。それに、家の核家族化、それにともなった家の近代化、燃料革命の進行などが相まって、昔話を語り、それを支えてきた諸条件が崩壊し始めたのである。

従前に比して、採集に著しく困難を感じたにしても、ここに成稿に達し、「羽後の昔話」の姿を見ることになった。それについても、採集にあたって、終始全体的な援助を与えていただいた秋田県総務部次長後藤孝一氏、ならびに、それぞれの地域で収集に便宜を与え、応援を与えられた鹿角市花輪町公民館長関久、北秋田郡阿仁町町長沢井作蔵、同森吉町町長近藤富治郎、山本郡琴丘町教育委員会教育長田中健仁、由利郡大内町公民館長小笠原弥、同由利町公民館長熊谷久左衛門、同鳥海村役場総務課長太田又司、仙北郡田沢湖町秋田県民俗芸能協会会長田口秀吉、雄勝郡東成瀬村教育委員会伊勢谷武昭の諸氏、ならびに、現地で案内していただいた人びと、さらには、こころよく話を聞かせてくださった方々にたいし、厚く感謝の意をささぐるものである。

昭和五十二年八月

今村泰子

凡例

(1) 本文は語り手が方言のまま語ったものを、できるだけ忠実に文字化したものである。

(2) 本文の題は、語り手または編者がつけたものである。

(3) それぞれの本文の後に、『日本昔話名彙』（柳田国男監修・日本放送協会編、日本放送出版協会刊）の話型を示し、『名彙』にないものについては『日本昔話集成』（関敬吾著、角川書店刊）につき、その話型を示した。

(4) それぞれの本文の後には、その話の語り手の住所氏名を記した。

(5) 方言をもって記載する以上、それについて一応の解説を要するわけだけれども、簡単にその要を尽すことは容易なことでない。それゆえに、特殊で、難解な方言については、共通語の傍注をつけた。ただし、二、三の特殊な点について解説を加えてみよう。

(イ) 秋田の方言では、名詞の下に「こ」の接尾語がつくことがある。

牛こ　爺っこ　餅こ

などがそれで、多くの場合、親愛、謙遜などの意を現わすときに用いられる。

(ロ) 助詞が転訛することも多いが、脱落したり、子音が脱落して母音が上の音と融合することも

多い。

学校さ行く＝学校に行く

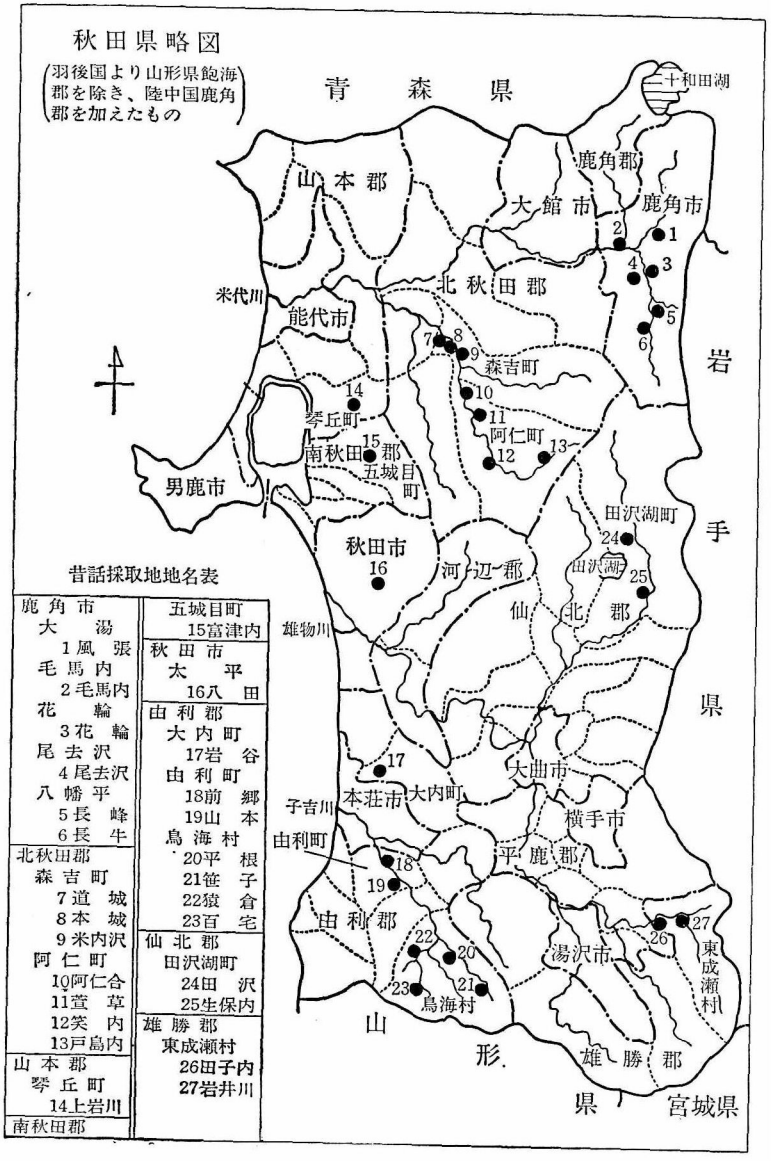
風吹ぐ＝風が吹く　水飲みてぇ＝水が飲みたい

花ぁ咲ぐ＝花が咲く　左ぁ山だ＝左は山だ

(ハ) 音の転換が多い。すなわち、母音や子音が、それぞれ相互に転換したり、音がはねる音や鼻音・鼻濁音化することがそれである。ただし、その具体例は、わずらわしくなるから、本文で読みとっていただきたい。

(ニ) 方言で、漢字の当てられる言葉は、読解を容易にするため、大体において漢字で表記し、それに方言の振り仮名をふることにした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c



昔話採取地地名表

鹿角市	五城目町
大湯	15富津内
1風張	秋田市
毛馬内	太平
2毛馬内	16八田
花輪	由利郡
3花輪	大内町
尾去沢	17岩谷
4尾去沢	由利町
八幡平	18前郷
5長峰	19山本
6長牛	鳥海村
北秋田郡	20平根
森吉町	21笹子
7道城	22猿倉
8本城	23百宅
9米内沢	仙北郡
阿仁町	田沢湖町
10阿仁合	24田沢
11萱草	25生保内
12笑内	雄勝郡
13戸島内	東成瀬村
山本郡	26田子内
琴丘町	27岩井川
14上岩川	
南秋田郡	

目次

いのち長きものへの畏敬……1
はしがき……5
凡例……7
地図……9

昔話

牛方と山姥……19
化け狐……22
屁ったれ嫁こ……24
せつめん……27
馬この尻穴のぞいてらぁ……30
狐とかわうそ……32
まま食ねぇあっぱ……35
狐の火……38

これとおれと夫婦……42
母の首……44
狐の提灯こ……47
地獄追放……49
見るなの部屋……53
しし汁……55
化け太鼓……58
しらみの物語……60
雀のむかし……61
魚女房……65
猿と雉の田作り……67
狐退治……69
耳からとんべ……72
尻鳴り袋……74
馬鹿な兄……77
雀とけらつづき……80
蛇抜け……81

妻の焼餅……82
団子浄土……83
饅頭問答……86
米福、粟福……89
角かくし……93
桑原、桑原……94
十二支……95
昼寝の心得……96
茶釜に化けた狐……97
三匹の術つかい……100
鶯になった娘……102
炭焼きと嫁……105
娘のはからい……107
小僧と除夜の鐘……108
猫と犬と宝物……111
古屋のもり……115
童子丸……116

屁つかめぇ……119
隣の藤五郎……120
てんぽ語り……122
長い名前……123
栗太郎……125
長くなった鼻……129
座敷わらし……135
厄神除けのぼた餅……138
麦のはなし……141
化物おどり……145
なら梨採り……147
座頭と餅……153
三人兄弟……156
すねこたんぱん……159
伊勢まいり……164
猿婿……167
笠地蔵……173

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c